

児童・生徒の博物館利用について

西川 卓志

一 はじめに

ここ数年、博物館が独自の教育プログラムをもつて行う教育活動が盛んである。それは、一部の歴史・美術愛好家、観光客をねらった運営や、一点豪華な収蔵品を持つ集客力をあてにした館運営から脱却して、より広範な博物館利用者の開拓と、博物館のもつ教育的な可能性を追求しようとすることに起因するものであろう。また、博物館が生涯学習の場として注目され、専門的な情報が集積されている施設と人の活用は、この分野において今後とも盛んになると予想される。さらに、学校において週休二日制が導入されて以後は、あらたに増えた休日活用の受け皿のひとつとして注目され、一時博物館もその対応に追われた。

これらの現象は、伊藤寿朗氏が提言したような「第三世代」博物館^①、地域に密着した活動的な博物館を、多くの館が志向し始めたあらわれである。とりわけ、子どもたち（児童・生徒）を対象とした種々の活動に多くの新しい試みが見られる。これらの新しい傾向は、欧米の博物館からはじまった。「ハンズ・オン」(Hands on)の考え方を運営の基調と

する館や「ワークショップ」(Work Shop)という名で概括される体験的な事業を中心とする館において特徴的である。

ハンズ・オンとは、展示資料に「触るな」という姿勢 (Hands off) とは逆にいろいろな資料に触れることによって資料そのものを理解する、もしくはひろい意味で触感を重視する博物館の経営姿勢そのものを表した用語である。いわゆる体験学習と呼称される事業ほど狭く限定されたものではなく、その具体化には柔軟な考え方と企画が要求される。染川香澄氏がアメリカ合衆国におけるそのような博物館を簡潔に紹介している^②。それによると、ハンズ・オンに基づく事業は多種多様で、とくに「子どものための博物館」で積極的に導入されているという。

ワークショップとは、博物館の教育活動のなかにおいて総合的に位置づけられた体験を重視する学習方法で、参加している間に種々のことを自然に体得できるように配慮されている事業形態をいう。かつて、静的荘厳さに支配されていた展示空間は、今日、活発な活動から生まれる喚声に満ちている。長谷川栄氏が主にヨーロッパの事例を中心に、ワークショップの基本的な考え方とその展開について論じられたなかで、ヨーロッパほどに体系的、汎市民的ではないにしても、近年日本の多くの館が

この事業形態を導入し注目すべき成果をあげていることに触れている。なかでも、伊藤寿朗氏によって広く紹介された平塚市博物館の例などは、国内各館が長期にわたった試行錯誤の末にいたったひとつの到達点といえる。

これら近年の博物館・資料館の事業の動向を踏まえ、筆者が勤務する西宮市立郷土資料館の実践例を題材に、特に児童・生徒という子どもたちの博物館利用とそれをむかえる博物館・資料館の対応について考えてみたい。

二 西宮市立郷土資料館の実践

①「親と子のための郷土史講座」①

西宮市立郷土資料館は、一九八〇年七月に歴史・考古・民俗の各資料を調査・収集し、展示等の事業を通して教育活動を行う施設として、西宮市教育文化センターの一角に公開された。館は当初から学校教育との連携を志向し、学芸職員に加え指導主事を配置した。指導主事は、日常的な学校団体の誘致とその展示説明、常設展示内容を補充する各種の補助教材（解説ビデオ・解説下書き）の作成に加え、夏季休暇中の教育プログラム（解説）を行う。館では児童生徒が比較的時間の余裕ができる夏季休暇中に合わせ、児童生徒向けの教育プログラムを実施する。初年度より実施している「親と子のための郷土史講座」、翌年度から実施された「中学生のための郷土史講座」がそれである。

これらの郷土史講座では、日ごろ児童生徒が詳しく学習することが少

ない郷土の歴史をテーマとし、同時に開催されている特別展に関連の内容を加え、一週間連続五回の講座が企画される。講師は小中学校の先生方をお願いし、指導主事が調整にあたる。講座では、日常の授業ではあまり接することのない郷土史に関係する種々の形態の資料が配布され、また同様の内容の視聴覚教材が多く用いられる。さらに、小学生対象の「親と子のための郷土史講座」では、その講座名の示す通り児童生徒の保護者が同席する。これは、たんに郷土史を集中して学習する場を成人対象にも同時に設定したというだけに留まらず、郷土史に関して保護者と児童生徒に共通の話題を提供し、そのことが郷土史に関する学習を家庭内に持ち込むという結果を生んだ。その後の動向については追跡調査を実施していないために不明であるが、最終日に行われる臨地学習会までに回収されるアンケート紙が異口同音に保護者と児童生徒が同席することのユニークさにふれていることが、この講座の特殊性と存続意義を物語っている。

第1表 「親と子のための郷土史講座」のカリキュラム例（1985年度）

- 第1回 8月20日 学校の生い立ち―寺子屋と古い学校―
- 第2回 8月21日 昔の道―西国街道を歩く―
- 第3回 8月22日 西宮の神社―広田・戎神社など―
- 第4回 8月23日 郷土を開く―百間種用水など―
- 第5回 8月24日 西宮の名産―酒・和紙・竹細工―

*初年度は、特別展と「中学生のための郷土史講座」は実施していない。

第2表 「親と子のための郷土史講座」「中学生のための郷土史講座」の

カリキュラム例(1993年度)

第1回 8月24日 お金とくらし—お金の歴史と名塩紙—

第2回 8月25日 石造物にたくした人々のねがい

—道しるべ・おじぞうさんより—

第3回 8月26日 戦争中の西宮—子どもたちのくらし・身近な戦

争のきずあと—

第4回 8月27日 川とくらし

—川の移りかわりと人々のくらし—

第5回 8月28日 臨地学習会

第1回 8月24日 古代の交通路と武庫の津

第2回 8月25日 お金の歴史—日本・世界そして西宮—

第3回 8月26日 教育制度の移りかわり—寺子屋から学校へ—

第4回 8月27日 西宮の地名から—園の多い町—

第5回 8月28日 臨地学習会

*本年度の特別展は「銅銭の考古学」である。

郷土資料館開館初年度と一九九三年の実施例をそれぞれ掲げた。それぞれに郷土史学習の場を提供し、実物資料を展示した常設展示室とともに「郷土史学習」に一定の役割を果たしていると思われる。しかし、この講座が教師・保護者・児童生徒という三者が一座して郷土史を学習するという特徴的な場を提供はしているものの、この学習の場でやりとり

されているものは形のない情報・知識であり、実物資料そのものがその場で活躍するという所ではない。

三 西宮市立郷土資料館の実践—「土曜展示室」—

この「土曜展示室」^⑥は、実物資料と博物館利用者(特に、児童・生徒)との新しい関係を模索する事業として、一九九〇年から始まった。

常設展示室は、それぞれ特有のテーマを掲げ、おおむね義務教育修了者に理解可能な文字情報や写真パネルをもって構成される。とくに、近年は多色刷りのグラフィック・パネルや視聴覚機器、各種のコンピュータが展示室に導入され、展示空間はいっけん視覚化立体化した。また、「わかりやすい展示(解説)」というスローガンのもと、そのために作られた模型や複製品が展示室内に配置された。これらの現象は展示室の印象を一変させ、いわゆる「わかりやすい展示」ができたかに見える。しかし、実物資料は華やかな他の展示品の中に埋没した。西宮市立郷土資料館でも、先述した通り小学校の利用を積極的に誘致する経営方針から常設展示を「見て面白い」ものにするため、多くの写真パネルや二次資料を配置した。これらの展示構成は一定の役割を果たしているものの、見学のために来館してくれる小学生たちと実物資料を直接的に結び付ける工夫には乏しかった。この点は、従来から歴史展示において指摘されている文字解説・脈絡重視の解説と実物資料との乖離^⑦という状況であり、情報としての郷土史は充分展示はされているものの、実物を充分に鑑賞する場を用意するには至らなかった。とくに、本館を授業の一環

として訪れてくれる小学校三年生では、義務教育修了者程度に設定された文字情報からは著しく疎外される。つまり、この児童生徒たちは、よく解らない解説と、見たこともない物が累々とならべられた場所にやって来たという感覚にとらわれるというわけである。

本館では、以上の認識にたつて指導主事と学芸員が検討し、展示活動の一環として「土曜展示室」を開始した。この事業では、ガラス・ケースの向こう側にある実物資料に直接触れ、文字情報や写真などの媒体を通さずに実物資料の理解に直接至ることを目的とした。また、通常の資料収集作業で集めた資料を活用するひとつの方法として位置づけ、たんなる体験学習の連続講座というのではなく、あくまでも展示の延長であるということにこだわった。事業を開始した当初は、

一、常設展示室の展示資料または、収蔵資料を難解な解説で紹介するのではなく、触れることによつて喚起される個々人の印象を重視する。

二、指導者が研究成果に基づいて指導するというのではなく、参加者の思いつきを重視する方法をとる。「正しい使い方」や「昔のやり方」を学んで知識化するというのではなく、資料と接することを最優先する。

三、展示の一環という立場から、参加者が一座して学習するという講座形式ではなく、見学希望者が三々五々訪れて学芸員とともに資料とまじわる。

四、したがって、参加申込みなどはまったく必要としない。

五、あくまでも展示資料・収集資料の活用であり、この事業用のレ

プリカなどを購入しない。

を運営の基本方針とした。対象は、先述の通り難解な文字解説や写真パネルから疎外されていると予想される小学生（とくに、低学年）とし、市内小学校の全クラスに掲示していただくために、事業の内容を紹介した「郷土資料館だより」を発行する。また、全市への広報として、「市政ニュース」を活用する。事前の募集と申込みという通例の方法はとらず、テーマに興味をもつた人々が自由に参加する形式で、二箇月に一度開催する。第3表と第4表にその内容を示した。

第3表 「土曜展示室」のカリキュラム例（1990年度）

第1回	5月19日	土器や石器をさわってみよう
第2回	7月21日	石臼をまわしたら
第3回	10月20日	むかしの農具を使ってみよう
第4回	1月19日	むかしのあかり
第5回	3月16日	むかしのこたつ

第4表 「土曜展示室」のカリキュラム例（1993年度）

第1回	5月15日	土器や石器をさわってみよう
第2回	7月17日	綿から糸を作ってみよう
第3回	9月18日	火をおこしてみよう
第4回	11月20日	脱穀をしよう
第5回	1月22日	石臼をまわそう
第6回	3月12日	灯をともそう

例えば、「石臼をまわそう」で使った資料は、民具として収集された粉きき用の石臼である。これを通常の展示として組み立てるなら、石臼の種類やその分布、または形の変遷を図示したグラフィック・パネルを背景に、数点の石臼が配置され、解説にはその発祥地・使用法などが数十字でまとめられた文字が書かれ、解説板となって飾られるはずである。そういう展示とは異なつてこの「土曜展示室」では、

一、まず触らせて何をする道具であるか考える。

二、使い方を想像する。例えば、回す方向について意見を出し合う。

三、原料を与え、いろいろと行つてみる。

四、上臼と下臼をはずして、中の構造を観察する。

五、中心部から周縁部にうつるにしたがつて原料の形状がどのように変化するか観察する。

六、感想をいろいろと聞く。

という段階を踏み、一つの民具を楽しみ尽くす。ここでは、よく展示解説に登場する「……という点に先人の知恵がみられる」という、児童生徒には不可解な予定調和的な文言とは無縁の体験的理解の場が成立する。

ガラス・ケースの向こう側に資料が整然と置かれていても、自身の知識と経験とに基づいて一定の脈絡のなかでそれを理解できる成人とは異なつて、子どもたちは不満である。この点は、歴史資料や考古・民俗資料を展示する館では永年の課題で、一時は「触れるコーナー」などと名付けられた展示台が常設展示室に持ち込まれた。ここでは紐の付いた須恵器などが展示され、「自由に触ってください」と書かれたプレートが置かれていた。これは先述したハンズ・オンの考え方をあまりに直接的

に取り入れたものである。土曜展示室では、ただたんに触れるということのみを追求するのではなく、また体験学習ほどに復元的な内容に厳密にこだわった学習でもなく、常設展示というワクのなかで気軽に資料に触りながら、学芸員といっしょに資料に対する好奇心を満足させていく場をめざしている。

四 まとめにかえて

以上、西宮市立郷土資料館における児童・生徒向けの教育活動の代表的なものを紹介し、その基本的な考え方について述べてきた。さらに、当館では学校団体が郷土学習の一環として大型バスなどで市内めぐりを行う時期に合わせて、民俗資料などをできるだけ多く紹介する「企画陳列」なども行っている。

本館所蔵の資料はその前身である西宮市立教育会館教育資料室が奔走して収集したものをその母体としており、その点数は新設館の開館時にしては比較的多いものであった。それら教育資料と民俗資料の活用が本館の活動の多くの部分を占める。常設展示室は、約二五五平方メートルと比較的小さく、そのため収蔵庫に保管された多くの民俗資料をすべて展示室に開陳するわけにはゆかない。開館以来九回にわたつて実施してきた特別展も民俗資料(民具)の公開に主眼をおいたものであったし、前述の「企画陳列」も同様である。しかし、これらは、あくまでも展示という手法を用いたものであり、児童・生徒たちは展示資料になじみにくい。また、分析的な内容を骨子とした展示はもとより、「……はよく

工夫された先人の知恵です」といった予定調和による平易な解説を用いた展示でも、それらが主張する情報そのものに彼らは興味がない。このような状況のなかで、多くの所蔵されている民具と低年齢層（児童・生徒）観覧者との間に「ハンズ・オン」という運営方針が成り立つ、また必要とされる基盤が生まれているといえる。とはいっても、あまりに実物資料を中心においた運営に固執し過ぎると内容が硬直したものになり、当初の目的が達成できないことになりかねない。ここで活躍する民俗資料は、活用の中で広がりを見せる資料が必要であり、その選定と事業の展開には周到さが要求される。ここに、復元的に限定されたいわゆる体験学習とはやや異なった世界が広がることになる。

前述した「ハンズ・オン」「ワークショップ」ともに、運営の基本には翻訳とでもいう特異な作業が伴う。展示が博物館・資料館の日常的な資料の収集・調査・研究の成果を各館独特の展示基本理念にてらして一定の脈絡にとりまとめ提示する方法であるのに比べ、この教育事業形態では資料そのもの、またはその周辺にある関連情報と、事業の具体的な内容との間に周到な仕掛けを必要とする。この「仕掛け」とは、例えばポンピドー国立芸術文化センターの「子供のアトリエ」^④に見られる美術を構成するものの主要な意味を直接感得させることを目的としたプログラムであったり、ポストンこどもの博物館における、まっぶたつにされた日常的な電気機械などを指す。また、それは具体的な資料そのものの選択姿勢であったり、何に没頭するかを見つけた視点であったりする。それは、単純な知識の一方的な注入という状況から抜けだし、動作を通してうまく仕掛けのなかへと没入していくことでもある。この点では美

術館のほうが貪欲であり、ドイツと日本の美術館芸員または美術教育関係者がおこなったシンポジウムでも議論が尽くされた^⑤。

本館は本年開館十年をむかえる。現状は入館者数の変遷が示している通り、開館直後のお祭騒ぎもようやく終わり、入館者数も年間約三万数千人に落ち着いている。その約数パーセントを学校団体が占め、その状況は開館以来大きく変わらない。今後、本館の継続的な有効性を確保するには、よく論じられる「地域との関わり」をたいせつにしていく段階を迎えているといえる。地域重視の姿勢は各館各様で、本館でも成人向きの事業を実施しながらも、活動対象の重心を子供に置いている。これには、これからの博物館をうまく利用していく姿勢を身につけた人々たちを育成するという目的もある。「参加型」といわれる博物館・資料館へと脱皮をはかることは、多くの館で活発であるが、それには「参加する」ことに一定の意味を感じる人の存在が前提である。ここに、実物資料になじむ場を作ることについて、児童・生徒にこだわる点がある。学校教育と直接的に連結する「学校団体の誘致」、「企画陳列」や「親と子のための郷土史講座」、自由参加を前提に常設展示室のさらなる広がりを実物資料になじむことを児童・生徒に対して発信する「土曜展示室」が、それぞれの役割を果たしている。ただ、筆者は「保存・公開型」と「参加型」の相違は、前者が後進的で後者が先進的とは考えない。また、かならずしも前者から後者へと移行すべきものとも考えない。博物館の核になるべきことは資料の「収集・保存・分類整理・調査研究」とそれらを支える館全体の運営方針である。そこから案出される各種の教育事業は、その時ごとにもっとも効果のあるものを柔軟に選択し対応すべきも

のである。ただ、重要なことは、「保存・公開型」と「参加型」の相違を表層的にとらえ、いっけん市民参加風に見える事業を連発することだけはさけるべきであるということである。こういう傾向は、伊藤寿朗氏が主張した市民参加型博物館の重要性からはもつとも遠いところに位置している。この点においては、本館におけるハンズ・オンの実践例である「土曜展示室」でも不十分な点がないとはいえない。

「土曜展示室」の今後議論していく必要がある点には以下のものがあげられよう。

一、事業の開催主旨から実物資料そのものに直接触れさせることが常であり、その点で実物資料を若干なりとも消耗する危険をはらんでいる。このような事業形態が民俗資料の活用といった点で適切か。また、この点の改善策として事業用にレプリカを作成し利用する方法が考えられるが、この点の是非は現在その方法も加味して実験中であるので結論的なことは言えない。おおよそきな支障はないようである。

二、参加人数に比較して、扱える資料に限度がある。通常三十人前後が集まるが、内容によっては資料が不足する。この点で、この種の事業では、圧倒的に多くの資料と同時並行で動作するプログラムが必要であろう。

三、いろいろな方法により「講座形式」から逃れようとするが、一方的な知識供給型の講座形式から脱却しがたい面がある。実物資料と参加者のより深い理解とを橋渡しする「仕掛け」の案出がいつそう望まれる。

これらの諸点は、西宮市立郷土資料館における児童生徒向けの事業の抱える問題点だけにとどまらず、上述したような事業形態をとり始められた館に共通のものではないかと考える。児童・生徒に迎合するというのではなく、たんなる解説には承服しない彼らを観覧者の主人公にすえ、実物資料の理解を観覧者にひろく浸透させていく思想や方法を鍛練していくには、この近年見られる「ハンズ・オン」や「ワークショップ」の事業形態は実り多い結果を博物館・資料館に残してくれるのではないだろうか。

今回、西宮市立郷土資料館の児童・生徒向け事業を題材に、近年の博物館における教育事業、特に子供向けのそれについて検討した。西宮市立郷土資料館でも各事業は、館員の相互の協力のもと運営されており、おおむね好評を博している。ここに記述したのは筆者の私見であり、内容のいたらないところはすべて筆者の責任である。

また、本稿執筆中に兵庫県南部地震が来襲した。その惨状は報道される以上であり、西宮市立郷土資料館も被害をうけた。本稿で述べた館利用の主役たちもそれぞれに大きな被害のもとにある。平成六年度から七年度にかけて、上述したような事業が継続できるか否かまったく現段階では不明である。一日もはやく楽しい各種の事業が復活できる日をまち望むとともに、多くの犠牲になられた方々のご冥福をお祈りしたい。

- ① 伊藤寿朗 『ひらけ、博物館』岩波ブックレットNo188 一九九二年
伊藤寿朗 『市民のなかの博物館』 一九九三年
- ② 染川香澄 『こどものための博物館』岩波ブックレットNo362 一九九四年
- ③ 長谷川栄 『新しい美術館学』エコ・ミュージゼの実際 一九九四年
- ④ 伊藤寿朗 『ひらけ、博物館』岩波ブックレットNo188 一九九二年
この著書のなかで、氏は種々の博物館および類似施設をいろいろな指標を示しながら分類している。地域に根ざした博物館とそのめざすものを提示しながら、実践的な経営論にまで言及している。そのなかで、平塚市博物館は「地域博物館の旗手」と評価され、地域志向型の館として絶賛した。
- ⑤ 西宮市立郷土資料館 『西宮市立郷土資料館報』昭和六〇年度 一九八六年
西宮市立郷土資料館 『西宮市立郷土資料館報』平成五年度 一九九四年
- ⑥ 拙稿「土曜てんじ室について」『西宮市立郷土資料館ニュース』第八号 一九九一年
- ⑦ 湯浅 隆 『歴史系博物館の研究と展示』『MUSEUM』第466号 一九九〇年
田中義恭 「博物館美術館の展示とその原点―博物館美術館の諸問題―」『MUSEUM』第470号 一九九〇年
- ⑧ 西宮市立郷土資料館 『西宮市立郷土資料館報』平成二年度 一九九一年
- ⑨ 西宮市立郷土資料館 『西宮市立郷土資料館報』平成五年度 一九九四年
- ⑩ 日本エディタースクール出版部 『列島の文化史』8 一九九二年に収載されている「博物館と民俗学」と題された対談における大月隆寛氏と牛島史彦氏の発言（一二二頁から一二三頁）に民俗資料と予定調和に関する興味深いやりとりがある。
- ⑪ 長谷川栄 『新しい美術館学』エコ・ミュージゼの実際 一九九四年
染川香澄 『こどものための博物館』岩波ブックレットNo362 一九九四年
- ⑫ 「日本・ドイツ美術館教育シンポジウム行動 一九九二」報告書編集委員会
『街から美術館へ 美術館から街へ』（日本・ドイツ美術館教育シンポジウム行動一九九二）報告書 一九九四年